

例証として、前もって理性を働かせて下さい。

注一 齊藤美洲編著『イギリス文学史序説 社会と文学』（中教出版、一九七八年）、p.68.

誰も死神が加える危害からは立ち直れないし、彼の一撃に対して如何なる救いの術もありません。

注二 W.F.Schirmer, *John Lydgate: A Study in the Culture of XVth Century* (translated by Ann E.Keep, Univ. of California Press, 1961), p.87.

運命の女神を信じて安定するのは非常に難しいことです。

注三 *ibid.*, p.85.

彼女の車輪は絶えず回転しています。

注四 *The Riverside Chaucer* (ed.L.D.Benson),p.934.

争いや軋轢を避けるために

あなた方のなかで敵対することなく、

ポンペイウスとジュリアス・シーザーのことを

何時も思い起こして、理性を働かせて下さい。

終わり

(平成十二年五月十日受理)

短剣でジュリアス・シーザーは

ブルータスとカッシウスによつてローマにおいて暗殺されました、多くの国々を従属させていたというのに。

ああ、如何なる時でも運命を信ずる者など誰がいるだろうか。

このように賢明な我が師の記述を見ても、意固地で、つむじ曲がりて、盲目で、あまのじゃくの運命の女神は、気紛れな思いがけない一撃を加えて、皇帝であろうと王侯であろうと容赦することなく、不安定な車輪の頂点から突然転落させています。ああ、皆様方、心の目を開いて、不誠実な世の中の無常と突然の変化を留意して下さい。国々を統治なさる賢明な方々、この勇敢なシーザーの一件を模範として、疫病のような分裂の損傷と損害のことを斟酌して下さい。また、シーザーの野心的な傲慢さ、ポンペイウスの焼き尽くすような嫉妬（の炎）、それにマルクス・クラッススの飽くことを知らない食欲さが、如何に彼ら自身の破滅を招いて、残酷な死を遂げる主な原因であつたか、十分に考慮して例証して下さい。同様に、これら三つの忌まわしい悪徳は、彼ら自身の死を引き起こす原因であつただけでなく、数え切れないほど大勢の者が死ぬ原因にもなりました。おまけに、ローマの都は、一方では古から蓄えられていた財宝が略奪され、他方では騎士たちが死んで、荒廃させられてしまいました。このことは、戦争を始めるとはどういうことなのかを例証する格好の素材であり、分裂による回復しがたい損害を考慮する絶好の素材だと思えます。このような理

由で、私（ジョン・リドゲイト）は閣下【ハンフリー、グロスター公爵】の命令によつて、この短い簡明な翻訳を引き受け、閣下を喜ばせようと、私のささやかな技量を駆使してこの物語を書きました。

あとがき

文彩を整えたこの些細な散文によると、大きな災害と破壊が、強大で素晴らしいローマの都にかつて起こりましたが、不正な分裂によつてもたらされたものでした。物語が述べていますように、ポンペイウスの食欲さとジュリアス・シーザーの不実な野心が原因でした。キリスト自らも聖書のなかで告げていますように、どんな国々もどんな地方も分裂すれば、決して繁栄することなく、急速に荒廃してしまいます。それゆえ、賢明で、勇敢で、徳の高い名声を轟かせた王侯の皆様方、ポンペイウスとジュリアス・シーザーのことを

ここでシーザーが死ぬ前に起こった諸々の不思議な予兆について簡潔に述べましょう。第一の予兆として、シーザーが死ぬ同年、カプア【イタリア南部カンパニア州北西部の町】の島において、その町の石工によって立派な墓石が創設されていますが、そのなかに「カピスの墓の覆いがとられて遺骨が暴かれるまさにその年、誉れ高き征服者ジュリアス・シーザーは、彼が最も信頼する者たちの不正な陰謀によって、ローマのカピトリウムで暗殺されるであろう」というギリシア文字で刻まれた黄金の小さな銘板が見出されたことが思い起こされます。因みに、カピスという人物は誉れ高い権力者で、彼の名をとって付けられたカプアの町の創設者でした。実際にこのギリシア文字で示された予兆は起こっています。第二の予兆は彼が死ぬ直前に起こりました。暗殺されるまさに前夜、彼は夢のなかで鷲のように羽ばたいて空高く舞い上がって、天帝ジュピターの玉座に参り、この神の右手に降り立つようなお告げを受けました。第三の予兆は、夫が死ぬほんの少し前に、妻のカルプルニア【三番目の妻】が見た夢にありました。夢のなかで王宮の最も高い小尖塔が突然崩れ落ちたり、寝室の窓の鉄格子が誰も触れていないのに二つに折れて、全部の窓が開いたりしました。彼女は夢のなかでのこのような物音に恐れて叫び声をあげ、この夢がどのような意味なのか理解できずに、女性特有の不安からひどく溜息をついています。別の予兆は、ヴァンサン・ド・ボーヴェが『歴史の鏡』のなかで述べていますように、彼の痛ましい暗殺の百日前に起こりました。ローマの大きな市場には、シーザーの立像が高い柱の上に据えられており、その頭

部の上に金文字でシーザーと刻まれています。快晴で穏やかな日中でしたが、突然の雷光によって、シーザーのCという頭文字が打ち砕かれてしまいました。これは、Cという文字が数字の百を示しており、Cはシーザーの主要な大文字として精巧に刻まれていたのに、雷光によって打ち砕かれたというところで、この世界の支配者が百日以内にローマにおいて冷酷に暗殺されるであろうとの予兆でした。また暗殺される同日、シーザーが集会所に皇帝の出で立ちをして向かっていると、トンギリウスという貧しい男が彼の暗殺に関する元老院の陰謀を知らせる手紙を手渡しますが、彼がそれを開封して読むことを怠ったがために、その冷酷な暗殺は実行されてしまいました。このことを例証として、手紙を読み遅れるような怠惰の罪には陥らないで下さい。それが原因で取り返しつかないようなひどい損害を被る羽目になります。

この暗殺の首謀者はブルータスとカッシウスで、彼らに二百六十名の元老院が関与し、皆袖の下に短剣を忍ばせていました。物語のなかで述べられていきますように、シーザーがカピトリウムで席に着いた時、彼らは彼の二十四箇所に致命傷を与えました。だが、彼は傷の痛みのなかでも決して叫んだり騒いだりしないで、突然の悲しみに怯えた者のように、悲しみに満ちた溜息をつくだけでした。彼の無残な暗殺に関して結論的に言えば、英語において詩人の華であり、修辞法や雄弁法を駆使して我が言語を飾り立てた最初の人物である、我が師チヨースーがこの強大な皇帝の死について簡潔に述べています。

うとしたプトレマイオス王の命令によって首をはねられてしまいました。

一方、シーザーはポンペイウス軍との戦いに勝利した後、急いでシリア領を通過し、アレクサンドリア【エジプト北部の海港都市】の強大な町に進軍しました。アレクサンドリアのプトレマイオス王は陸上でも海上でもシーザーと会戦し、その戦で陸上においては二万二千人の兵が殺害され、海上においては千二百隻の舟が破壊されて沈められました。彼は舟を捨てて（海上での戦いから逃れて）陸に上がろうと急いでいると、（舟から）転落して溺れてしまいました。彼の遺体は浜辺に打ち上げられると、身元は判明しました。シーザーがアレクサンドリアの町に贈らせていた金箔の袖無し鎖帷子をその遺体が着用していたからでした。このことに恐れをなして、民衆はアレクサンドリアの町をシーザーに明け渡しました。

それからシーザーはエジプトに赴き、プトレマイオス王の死に乗じて、その国の笏と王冠をクレオパトラに授け、全権を女王に委ねました。彼は多くの領土と国々を征服した後、再度ローマに帰還し、執政官と独裁官の二つの官職を手に入れました。

シーザーはアフリカにも遠征して、ポンペイウスの親族と同盟軍と戦い、ファウトゥス、キラ、ポストゥムスの三人の猛者を含めて、ポンペイウス軍に心を傾けて好意的だった將軍をすべて殺害し、おまけに彼の娘ポンペイアに死刑の判決を言い渡しました。次に、強力な軍勢を引き連れてスペインに進軍し、スエトニウス【ローマの伝記作家・歴史家】が述べていますように、スペイン側からはローマに差し出される貢ぎ物を受け取るとい

う権限を手中にしました。更に遠征を続けて、カデイス【紀元前一〇〇年頃、フェニキア人によって建設された植民地】にあるヘラクレスの柱に達し、怪力無双の英雄ヘラクレスの神殿に入りました。その神殿のなかで、アレクサンダー大王【マケドニアの王（紀元前三三六―三二三）】の記念物として造られた黄金像を見ると、彼は溜息をつき、アレクサンダー大王やヘラクレスのような英雄の榮譽に値する手柄をこの遠征において成し遂げるなんて決してできないと心のなかで嘆きました。彼は悲しみに沈んでその神殿から出ると、騎士らしく新たな武勇の企てに乗り出そうと決意しました。忙しく（精神的に）抑制されていた彼は、翌日の夜、不思議な夢を見ました。その夢は母と近親相姦の罪を犯すというものでした。この夢を彼は大層恐れ怯え、彼の面前に賢明な哲学者と予言者を呼び求めて、この夢を明確に判断させました。すると直ちに、彼らはこの夢はシーザーが全世界を占領してローマ帝国の実権を握ることになる確かな前兆であると結論を出しました。というのは、賢明な哲学者たちは、彼が（夢のなかで）犯した母との近親相姦は母なる大地と彼との間で交わされた同盟の絆であり、彼が世界全土の皇帝になるだろうと夢判断からは解釈できる以外に、何一つ分からなかったからでした。こうしてアフリカを征服した後、直ちに彼はローマに帰還し、全世界の皇帝という地位に上り詰めました。だが、栄光の太陽が天空に駆け上がり、頂点に達すれば、必然的に下降しなければならぬように、彼が帝国内でその地位を保てたのはほんの一年程度でした。

れば、混乱の前触れでした。その他、私がここで触れなかつた数多くの予兆によつても、疫病のような分裂から生じる都の荒廃については、ずっと以前から示されていました。

物語の内容を簡潔に取り扱ひましょう。シーザーは強大な軍勢を引き連れてローマの領域に進軍し、アリミヌムの町を占領した後、ラヴェンナ【イタリア北東部の都市】を征服しました。一方、ポンペイウスは恐怖のあまりギリシア方面に身を引いて陣を立て直しました。ローマ側は、シーザーが都に入ってくるならば、全軍を都の外に駐留させておくようにと即刻言い渡しますが、シーザーが甚だ強大であると分かると、大将のポンペイウスがいなかつたので、おののいてしまいました。このような実情から、ポンペイウスの將軍たちのなかには、かつてディラキウム【アドリア海に臨む港市ドウレスの古代名】と呼ばれたイタリア方面の町に退いていく者もいました。誉れ高きシーザーは軍勢を引き連れて追跡し、抵抗する敵はすべて殺害し、抵抗しない敵は敗走させました。日毎に彼の勢力は増大し、敵軍を物ともせず、大挙してローマの都に入りました。諸々の著者が述べていますように、ローマ市民は恐ろしさのあまり彼を城門で迎え入れようとしませんが、そのことに彼は憤慨し、高慢な態度を取つて城壁を破壊させ、堂々と征服者として（ローマの都に）入りました。彼は、自らの気分次第で、ローマ市民を裁き、ローマの都だけでなく帝国全土の支配権を一手に握り、元老院を物ともしないで、財宝が蓄えられている真鍮製のドアを壊して、力づくで財宝を奪い取り、それらを部下たちに分け与えました。

一方、東方の国々の大勢の騎士たちは、ポンペイウス軍を支援してシーザーに対抗しようとする一心から、ディラキウムの町に結集していました。その結集の知らせを受けるとすぐに、シーザーは全軍を率いて、我が著者によれば、エベイロス【ギリシア北西部、イオニア海に接する地域】という町を通過し、テッサリア【ギリシア中東部のエーゲ海に臨む地方】の辺境に進軍しました。そこにポンペイウスが八十八隊の歩兵隊を三軍に分けて陣容を構えていたのでした。ここで一隊の歩兵隊の数と大きさについて述べておきましょう。歩兵隊には大小の二種類があり、著者らの説明によれば、大隊は五百人、小隊は三百人で編成されていました。ポンペイウス軍に関して言えば、四万の歩兵と（本隊の）左翼に六百の騎兵、右翼に五百の騎兵による戦闘隊形でした。これらの騎兵のなかには、ヴァンサン・ド・ボーヴェ【一三世紀のドミニコ派修道僧】が『歴史の鏡』のなかで述べていますように、数多くの王侯、ローマの元老院議員、それにポンペイウスを支援するために参戦したローマの騎士らも含まれていました。他方、シーザーも八十隊の歩兵隊を三軍に分けた陣容を取り、大勢の誉れ高き騎兵のほか、三万の歩兵がいました。遂に双方の死闘が展開されると、ポンペイウス軍は敗走して、彼の陣営では一万二千もの兵が殺害され、百卒長【百人隊の隊長】という誉れ高き將軍は三十三人も殺害されました。ポンペイウスは戦場から退却し、避難の地を求めて舟に乗り、小アジア【黒海と地中海の間の地域】を通過してティルスの町を通り抜け、エジプトに着しました。だが、そこに到着するとすぐに、彼はシーザーの寵愛を得よ

生じる都の荒廢を嘆いて、涙を地面にまで滴り落とすほど、とめどなく流しました。また自然の習慣に反して、鳥が夜中に飛び回るのが目撃されたり、獸同志の話し声が聞かれたり、女性が奇形の子供を産んだりしました。このような不思議な出来事はローマの都で分裂が生じるほんの少し前に起こりました。というのは、巫女シクイラがローマの元老院議員らに三つのRと三つのFからなる六文字で短く要約した意見書を送った頃、彼女がかなり前から予言していた恐ろしい時が間近に迫ってきたからでした。その六文字は必然的にローマに降り懸かる災いの予兆で、「ローマ帝国は剣レグナローメルウエントと炎と飢餓フエロラマ、フアムによつて没落するであろう」を意味しています。(英語で) 言い換えると、ローマの国々は、最初は戦の剣によつて、次に戦火によつて、そして飢餓によつて荒廢するだろうになります。戦火と飢餓の二つの災いは、疫病のように都に襲いかかるので、免れるまぬがことなどできるはずありません。本当に、このような混乱の原因は不和と分裂によつて生じるものなのです。更に、ローマの都で起こった様々な予兆について述べましょう。聖職者らが神々に生け贄を捧げる儀式を行っていると、炎が突然消えました。死者を埋葬した墓穴や墓のなかでは、悲しげなざわめきと音が聞かれ、それは民衆を大いに不安と恐怖に陥れました。修道会の大僧正が儀礼的な慣習として雄牛をつかみ、神殿の祭壇の前にその首をおとなしく下げさせて、入手できる極上のワインでその角を洗い清めました。それからその雄牛は生け贄として殺されるに相応しいと彼らは判断し、アリンズという司祭長がこの雄牛を剣で切り裂きました。だが、この生け贄は神々には好まれなかつ

たという悲しむべき分裂の予兆として、本来赤色であるこの動物の血は真つ黒くしていました。彼は死人のように顔が青ざめ、恐ろしくて呆然となり、内臓にもつと縁起のいい前兆を見出そうと期待していましたが、我が著者が述べていますように、その内臓は鼻持ちならない腐肉のようないやな臭いでした。これは動物の生け贄も血の生け贄も、特に二心ある者によつて捧げられた場合、神の御前では受け入れられないという明瞭なお告げでした。それゆえ、分裂は人と人とを仲違いさせるだけでなく、人と神との関係を疎遠にさせる要因であると言えます。それから司祭長は雄牛を切り裂いて、胃と心臓を取り出し、それらを二つに切断して、一方をシーザーの生け贄、他方をポンペイウスの生け贄としました。それらが炎のなかに入れられると、ポンペイウスのものは突然消え、シーザーのものは赤々と燃え上がって焼き尽くされました。これは、死闘を交える分裂において、シーザーが勝者となり、ポンペイウスが敗者となるだろうという明白なお告げでした。このように(ローマに降り懸かる) 災いと(都の) 荒廢の予兆が、まず天空に出現した様々な星座の姿形によつて、次に地上で起こった不思議な出来事によつて、最後に動物の生け贄による驚嘆すべきお告げによつて示されました。動物が生け贄として切り裂かれた場合、なかには心臓がない動物もいました。これは神々の愛情が彼らから離れてしまったことをローマの都に公然と示すためでした。また種々の鳥が、人々を恐れることなく慣れ親しんで、ローマの都に飛んできました。これは、卜占官【古代ローマで鳥の挙動などによつて公事の吉凶を判断した僧官】の解釈によ

が示す例証を述べたいと思います。この著者によりますと、かつてローマの都が、新たに生じた争いが原因で、分裂しそうになった際、ある賢い哲学者は将来起こりそうな深刻な危機を斟酌し、智恵を巡らして将来起こりそうな大きな災害を回避させようと考えました。彼は、元老院と諸侯の面前に、尻尾の長い馬を連れてこさせ、町一番の力士にぐいと引つ張つてその尻尾を引き抜くことができるかどうか試みるよう命じました。だが、力士が有らん限りの力を出して引つ張つても、彼の行為は徒勞に終わりました。すると直ちに哲学者は、元老院の前に、都で最も非力で寄る年波で不格好に腰の曲がった男を呼び求めさせ、彼に馬の尻尾を一本一本抜かせました。遂に、馬の尻尾はすっかりなくなり、丸裸になりました。そこで哲学者は言いました。「ご覧下さい、馬の尻尾が束になって分けられていない場合は、都一番の力士でさえも、それに何の損傷を与えることはできませんでした。だが、その尻尾が一本一本分けられるとすぐに、最も非力な者でも尻尾を完全に抜き取つてしまいました。このような例証から、あなた方が心を通わせて一致団結している限り、あなた方を大挙して攻撃しようとする強国など何処にも存在しないことを心に留めて下さい。だが、あなた方の間に分裂が生じるとすぐに、敵は十分な力もなく殆ど名を揚げていないのに、あなた方の最も美しく最もきらびやかな栄光という羽毛を次々に引き抜くことでしょう。」こうして哲学者はこの例証を用いてローマ市民を仲直りさせ、分裂を回避させました。

さて、物語が述べる本題に戻りましょう。ローマ市民はどちらの側につ

くべきか大いに議論していると、神々は様々な前兆によって起こり得る大きな災害を彼らに告げようと、多くの奇妙な星座を出現させました。燃え盛る炎の鎖帷子くさりかたびらを着ている星座もあれば、手に松明を持つて周辺に炎のような輝きを放つ星座もあれば、投げ槍や鋭い鎗矢かぶらやを空に射る星座もありました。特に、巨大な彗星が出現し、その尾が空全体に及んでいました。また、太陽が子午線上でとても明るく輝いている頃、突然、昼が夜に変わり、朧月おぼろぎも自然の運行に逆らつて光を失い、シシリー島沖合いの恐ろしいカリブデイス【渦巻】も血の色に変わり、ローマの領域にいた獵犬も吠えるのをやめ、来るべき大きな災いの前兆に遠ぼえしていました。それは聞くに哀れな鳴き声でした。貞節な女神ウエスタ【炉と家庭の女神】の神殿においては、信仰に基づいて炎が祭壇上で赤々と燃やされていたものですが、その炎が二つに分かれるとすぐに、ローマでの祝いの催しや荘厳な儀式を取り止めるべしという予言が昔からありました。そしてテーベの兄弟を弔う炎の煙が分かれたように、この女神の祭壇の炎が割れたということは、本当に起こるであろう分裂の予兆でした。詰まるところ、慈愛の炎が二つに割れるところでは、救済の術すべもない破滅への確かな予兆であることをあらゆる国々に示しておきましょう。さらにローマで生じた分裂という突然の災いへの明白な予兆として、隣接する海では泡立つ波が突然高まり、アトラス山脈の最高峰を乗り越えるほどになりました。素晴らしい礼拝堂にある偶像のように、ローマの神殿にある金、銀、その他の金属から造られた高価な偶像は、分裂が生じると、悲しげに呻うめき、疫病のような分裂から

て下さいませ。あなた方の支援を受けましたならば、その企てを命がけて遣り遂げる決意でいます。私は（戦勝者に）相応しい儀式を執り行って私を迎え入れることを条件として、ローマの敵でも反逆者でもなく、正当な市民としてローマに認められた騎士として留まることを決意し、ローマの敵としてではなく、味方の臣下として忠誠を尽くすことを表明しました。

それゆえ、実権を握る元老院議員の方々よ、私が強大な軍勢を引き連れてローマ帝国の領域に入ったことを有罪としないようにお願いいたします。申し立てをすれば、悪事を働く意図などは全くなく、清廉潔白な気持ちであなた方のもとへやってきたわけで、それは敵としてではなく味方として迎えてもらうためのやむを得ない方策にすぎません。また、我々の間に故意に不和を引き起こさせようとする者を、その者がたとえ何者であろうと、あなた方の真の敵とみなすように懇願いたします。もし私の征服の手柄に値する報償が認められますならば、私は命が尽きるまでローマの忠実な騎士となり続けるつもりです。」

直ちにシーザーは、狼狽することなく恐れることなく、自らが先陣を切つて、ライオンのようにその川を渡りました。ルカヌスが述べていますように、彼が渡ろうとした時期、その川はいつもの流れとは違って氾濫していました。つまり、アルプスの白い雪が太陽の光に照らされてすっかり溶けていたので、谷の水かさが誰も渡ることができないほど増していました。

だが、シーザーは如何なる怪奇な出来事にも恐れることなく、勇者のように自信を持って、誉れ高き騎士たちの前で次のように語りました。「ここ

で私はローマと自分の間で交わされた昔の同盟関係を破棄し、ここであつての友愛関係をやめて、運命の道を辿るだけです。そして、我が方が申した和平調停によつては当然値する報償を得ることができそうにないので、全身全霊を捧げて、正義に基づく戦いを始めます。」

オローラ曙と呼ばれる夜明けに、直ちに、彼は誉れ高き騎士団を引き連れて、ルカヌスによれば、アリミヌム【イタリア北部アドリア海に臨む港市リミニの古称】と呼ばれたローマに従属する町に進軍しました。彼が最初に占領したこの町では、彼の剣の猛威に対して抵抗しようとする大胆な者など誰もいませんでした。その頃、ローマ市民はシーザーとポンペイウスのどちらの側に心を傾けるべきか決めかねていました。というのは、彼らは妻子のことを考えたり、古のローマの法規を重んじてたりして、ポンペイウスに好意を寄せつつも、シーザーの剣を恐れて、どつちつかずの状態に陥り、どうしたらよいか判断できずにいたからでした。ああ、如何に二人のすさまじい妬みが、全世界を支配下に治めて諸国の貴婦人とか女帝と呼ばれた、あの立派なローマの都を荒廃させる原因となったことか。というのは、この二人の間に、その後決してもとどおりに復元できない分裂、元の鞘に収まらない分裂が生じたからでした。ローマの属州と地方を統治している賢明な王侯たちよ、世間の人々が思うように、このことを内輪もめが如何に損害を招き、最終的に、如何に破滅をもたらすかという例証として下さい。

一致団結が分裂よりも如何に有益であるか、より確かな例証によつて実証できるように、私はウァレリウス【一世紀初期の逸話の収集・編纂者】

決別してしまいました。これが破滅を招く主な原因の一つであります。このような次第で、第三の原因が欲に基づいていることから、ルカヌスはそれを意欲的なものと呼んでいます。このように自然の例証によつて第一の原因は必然的なもの、前述の因習的な例証によつて第二の原因は慣習的なもの、そして欲に根ざした第三の原因は意欲的なものと呼ばれました。

ローマ市民は、シーザーとポンペイウスの間の争いにおいて、どちらの側に心を傾けるべきか躊躇っていました。ここでこの分裂の原因および英語で内乱と呼ばれる戦い^{ベルムシウレ}について簡潔に述べましょう。シーザーは己に對して企てられた不当な共同謀議を知らされると、直ぐにアルピオンから帰国の途につきました。西ドイツを通過し、種々の作家によつて嚴寒の山と呼ばれるアルプスを越えて、ロンバルディアの辺境を通過し、所定の道を通つて、遂に、ルビコン川と呼ばれる激流の川に到達しました。そこに黒い外套を纏い、顔をかぶりもので覆い、寄る年波で白髪になった、悲しそうな老婆が現れました。この悲しそうな老婆は、暗黒の夜がくすんだ見苦しい大外衣の縁で半球を覆う頃、心に満ちた悲痛を抑えきれずに、シーザーに對して嘆き始めました。

「おお、誉れ高き立派な騎士の皆さま方、そのような力強いマルス【戦の神】の出で立ちをして、どちらへ進軍しようと決意されているのですか。何処にしっかりと軍旗を据え付け、畏怖の念を抱かせる槍旗と旗を掲げようとしているのですか。おお、心のなかで燃え盛る激しい憎しみを何方^{どなた}に向けようとなさるのですか。そのような残酷なやり方であなた方の力を何

方に見せつけようとなさるのですか。あなた方はローマの元老院に派遣されて、誉れ高き立派な騎士とみなされていることを思い起こして下さい。

今、帝国の敵であるということを表に出してはいけません。これまで、あなた方の力によつて、帝国は四方の敵の攻撃から強固に守られてきたのですよ。おお、ローマの政治に関わる法規を心に留めて下さい。不俱戴天の敵でもローマへの反逆者でもない限りは、武装している者は誰でも、この川を渡るべからず、とその法規にはつきりと記されています。長い間、ローマを愛し、勇敢に振る舞つてその名声を守つてきた皆さま方、意欲的に急いで、あなた方自らを壊滅させるだけでなく、それに伴つて生じる夥しい流血によつて都を荒廃させることがないように、進軍をやめて、せつかちにならず、熟慮して手綱を締めて下さい。」このように老婆は簡潔に苦言を呈すると、すぐさま消え去りました。この勇敢で運命に愛された騎士シーザーは、奇怪な老婆の出現に多少狼狽し、軍を止めて川の岸边に沿つて天幕を張らせました。何とも言いがたい恐怖に襲われると、突然、彼は次のように語りました。「おお、自らの支配下にあるウルカヌス【火と鍛冶の神】に恐ろしい音を立てる雷を鑄造させ、電光で勇者の肝をも潰させる力強きジュピター【神々の王で支配者】よ、おお、かつてトロイの町において我が誉れ高い祖先を制御していた神々よ、そしてローマの都の創設者であり、強大な保護者で支援者でもある神々ロムルスとレムスよ、私はあなた方の慎ましい臣下として恭しく頭を下げて懇願いたします。どうか私の正当な大義の促進に手を貸して下さいませ。どうか大きな企てに力を貸し

される争いの主な原因と発端であり、シーザーとポンペイウスの間を生じる疫病のような分裂の始まりでもありました。

ルカヌスは、彼の本のなかで好んで述べていますが、諸々の原因のなかでも、とりわけ、双方の間に生じた分裂の根元として三つを挙げ、その三つによつてローマの繁栄と至福は必然的に陰りを見せて衰亡したにちがいないと立証しています。ルカヌスの言う三つとは、必然的なもの、慣習的なもの、意欲的なものです。

まず、必然的なものに関して、彼は自然の例証を用いて立証しています。太陽のポイボスは東の空に駆け上がり、正午に天空の頂上に達すると、自然の法則に従つて下降し、西の海に金色のたてがみを持つ馬を沈めます。すると、我が半球は彼の光が届かずに夜の帳とばりに包まれてしまいます。また、ヘーリオス〔太陽の神〕は同じ黄金の戦車を白羊宮から頂上の巨蟹宮まで旋回させると、自然の掟に従つて、彼は下降せざるを得ません。同様に、この世で燦然と輝く立派な人物であれ、絶頂に達すると直ぐに傾きだして、没落の一途を辿らない者など誰もいません。上げ潮の猛威で強大な高波になろうと、たちまち引き潮になつてもとの状態に戻るように、東の間の榮華に酔いしれた後には、最も恐ろしい思いがけない逆境の引き潮を経験することになるからです。また、木々や草花を見て分かるように、寒い冬が過ぎて緑豊かな春が訪れると、植物を成長させる力は、太陽の心地よい日差しを受けて、少しずつ小枝や大枝に行き渡り、新たに発芽させ、開花させ、元氣な瑞々しい若葉を出させ、やがて赤や白や緑などの様々な色の花々

で着飾らせて芳香を漂わせます。その後、太陽のアポロの影響が衰えてくと、その成長させる力は先端の方から再び根の方へと下ります。そのように、はかない富という花で飾られた幸運な者であれ、太陽のように燦然と輝く榮光が極まると直ぐに、思いも寄らない時に、逆境をもたらす出来事によつて、あるいは、病氣や死によつて、統治権を奪われ、どん底に沈められない者など誰もいません。以上のように、この世の虚飾と装飾は変化するという自然的で必然的な第一の原因に関して、我が著者ルカヌスは筋道を立てて立証しています。

慣習的なものと呼ばれる第二の原因に関しては、盲目な変化の貴婦人である運命の女神が人を車輪の頂上に昇らせると、突然一撃を加えて、その者を転落させるということが考えられます。明白な例証はかつて存在した王侯たちから取ることができます。

ルカヌスが彼の詩歌のなかで意欲的なものと呼びたがる、ローマの都の荒廃を招いた、第三の原因に関して言えば、それは理性に基づく如何なる立場も斟酌しない衝動的な欲望による原因と言ひ換えられます。というのは、人は至福のなかで暮らしていて、意欲のせいで盲目的になると、自己を知ろうとはしないで、幸福のなかでは安泰で、付随して発生する如何なる逆境の出来事によつても零落することはないと錯覚するからでした。従つて、人は誤つた傲慢さから意欲的になると、他人に服従することを嫌がり、それぞれが頑固になつて、己と他人は対等であると思ひ込むようになり、互いの間に敵意を抱かせる軋轢が生じて袂を分かち、

べますと、一つは彼が帰還する際、身分の高い者も低い者も市民全員が最上の装いをして、歓喜と祝福の雄叫びを挙げて途中で彼を出迎える、一つは捕虜や虜になった兵士らには、手枷足枷をかけさせたまま、ある者には彼の乗った戦車の前を、ある者にはその戦車の後ろを取り巻かせる、一つは天帝ジュピター愛用の紫の外套を羽織らせて彼を神のように奉り、頭には月桂樹の冠を被らせ、黄金の戦車に乗せ、棕櫚しゅろの葉を模して鑄造された黄金の首輪を身に付けさせるといふものでした。もし彼の征服が、剣の力を借りることなく、血を流すことなく、成し遂げられたならば、棕櫚の葉の冠には刺あるいは刺状突起物は付けられずに造られました。征服が運命を決する悲惨な戦闘によって成し遂げられたならば、慣習上、鋭い刺の付いた輪や胸当てが造られました。これは最終的には逆境という鋭い茨の痛みを感じさせる戦いによって、死あるいは貧困を伴って、征服が成し遂げられたことを示すためでした。勝利のしるしに黄金の鷲を付けた豪華な笏を手にして、戦勝者が乗り込む戦車は、四頭立ての白い軍馬に引かれて、都への王道を通って、カピトリウム【古代ローマのジュピターの神殿】へ向かいました。

だが、この世の栄光は一時的ではかないということ、また高い地位にも安泰がないということ、を明らかにいたしましょう。誰もが想像できないような汚い檻褌を着て、醜く装った、最もいかがわしくて最も浅ましい者が、この戦勝者が乗り込む戦車の後ろに陣取り、民衆の祝福の歓喜のなかで、誤った奢りと虚栄とくだらない称賛を（戦勝者から）排除しようと、

慣習として彼の首や頭を叩き、突然我が母国語で「己自身を知れ」にあたるギリシャ語を彼に語るようになっていました。これはこの世の榮譽ごとくで傲慢になったり奢ってはならないということを戦勝者に示すためでした。またその同じ日、身分の高い者も低い者も誰もがこの戦勝者に、彼の名譽となることであれ、不名譽となることであれ、非難の言葉であれ、言いたいことは何でも咎められることなく言えることが認められました。これが認められたのは、この世のどんな栄光も運命の女神の支配がなければ確保できるものなど何もないことを留意させるためでした。

ここで戦勝と圧勝の違いを簡潔に述べておきましょう。戦勝とは戦闘によつて敵軍を完全に打ち負かすことであり、圧勝とは剣を交えることなく敵軍に畏怖の念を抱かせて敗走させることを意味します。

さて、シーザーが当然与えられるべき報償と思つて要求した凱旋式について述べますと、ポンペイウスは、元老院全員の同意を得て、彼の要求を拒絶し、凱旋式は受け入れられないという返事を戻しました。しかもシーザーはローマの法規を蔑ろにした裏切り者でもあり反逆者でもあることを引用しながら、そのような名譽な儀式よりもむしろ死に値するといふ最終決定を知らせました。シーザーは元老院とポンペイウスからのそつけない返事を受け取ると、彼の心は嫉妬の熱い炎で、特に、ポンペイウスに恨みを晴らそうと込み上げてくる焼き尽くすほどの憎悪の炎で燃え上がりました。ルカヌス【紀元三九一六五年。ローマの詩人】が韻文のなかで述べていますように、シーザーへの凱旋式を拒絶したことが、ローマで引き起こ

シーザーがブリトン人のアルピオン【グレート・ブリテンの古名】を見事に攻略し支配した頃、同僚のマルクス・クラッススは東方世界でどう猛なバルティア人との壮絶な戦いの最中に殺されてしまいました。彼が敵軍に殺されたのは、彼の飽くことを知らない食欲が原因でした。バルティア人は金を溶かし、「生涯黄金を渴望した者よ、さあ思う存分飲むがよい」と言いながら、熱いままの金を彼の口に流し込みました。ここからも戦士の栄華は短く、束の間で、はかないことが分かります。その後のさらに不運で悲しい一日については、ポンペイウスの妻でシーザーの娘ジュリアが、出産が原因で、亡くなったことでした。これを大義名分として、ポンペイウスは元老院全員の同意を得て、シーザーをローマに呼び戻す口実を見つけました。その口実とは、急いでローマに帰還し、遠征先で無念にも殺された同僚のマルクス・クラッススの仇を直々に討つようというものでした。ポンペイウスは、遠征先での勝利によってシーザーが非常に強大になったので、彼が帰還すれば力関係は崩れ、彼に太刀打ちできなくなるのではないかと密かに不安を抱きました。また、シーザーは傲慢な態度で暴威をふるい、ローマの支配権を強奪して、一身に引き受けるのではないかという妄想から不安に駆られていました。だが、勇敢なシーザーは、一方ではポンペイウスの装った見せ掛けを、他方では元老院の巧妙な策略をしつかりと見抜き、熟慮した上で、既に着手している征服を成し遂げた後、要求に従って帰還するという返事を戻しました。

こうして他の人のことを誤って判断させる疑念と不和の大蛇が心のなか

に入り込みました。このことが、双方の間に嫉妬の熱い毒気のある炎を燃え立たせ、次から次へと戦や争いを引き起こさせました。

ポンペイウスと元老院は、一刻の猶予もなく彼らの目的を果たし、彼らの意図を明白に示そうと、シーザーは有罪であり、ローマに従わない反逆者で裏切り者であるという判決を満場一致で下しました。また、ローマからの追放という最終判決を下し、召還や帰還は永久に有り得ないとする法規を定めて、毒々しい悪意を執行しました。これはシーザーがその場にならないときの出来事でした。シーザーは、己に対して仕組まれたポンペイウスと元老院の悪意に満ちた毒々しい共同謀議には、無頓着で疑うこともなく、彼らの毒々しい悪意には全く気付かないままに、娘婿のポンペイウスだけでなく、元老院議員団と町の有力者に特使を遣わし、己の功労を正しく取り扱い、慣例にある報償、即ち、昔から戦勝者に当然与えられるべき報償の要求を故意に拒むことがないように求めました。また、強要されなくても進んで勝利の凱旋式を催すように求めました。彼がローマ帝国の公益を増大させ拡大させようと、長期に渡ろうと、騎士道の行為によって甚だ奮闘してきたのはこのためでした。

ローマにおいて、かつて戦勝者に対して行われた凱旋式のことを述べましょう。飾りのない英語で述べますと、凱旋式は騎士に相応しい征服によって色々な地方や町をローマ帝国に服従させて属国にし、高らかな名声と武勲をあげた戦勝者に執り行われる三重の喜び、あるいは、三つの方法による至上の名誉の儀式です。戦勝者に対してなされる三つの名誉について述

如何なる遠征の際でも、五年間という定められた期間を超過して帰国しない者は誰であろうと、直ぐに裁きを受け、ローマの都に対する紛れもない反逆者と誇られました。

この勇敢なシーザーは、自らの怠慢と物臭さの悪徳によつて好機を逃せば、その後愛想のよい好意的な運命の顔つきを取り戻すのは非常に難しいと考えました。それゆえ、彼は騎士の身分と武勇にかけて、ローマの法規を無視して五年の期限を超過し、ブルターニュ【フランス北西部の半島】の領土をかすめ取ろうと、また大洋の西にある我が地域を力づくで征服しようとして決意しました。

だが、彼の横柄な傲慢さにもかかわらず、そこに着く早々、彼は敬虔なブリタニア王カシウエラウヌスに二度も敗戦しました。掛け値なしに真実を語れば、この勇敢なカシウエラウヌス王とコーンウォール公爵アンドロギウスとの間に争いが生じるまでは、彼の勝利への道は決して有り得ませんでした。結論を言えば、ブリタニア国内が、分裂することなく、一致団結している間は、強大な征服者のシーザーでさえもその国を打ち負かすことはできませんでした。「分裂が州や区の滅亡の根源」という先程の金言はこの例証によつて理解いただけることでしょう。物語に述べられていますように、シーザーがアンドロギウスの支援を受けてその地に到着すると、直ぐに、勇敢なカシウエラウヌス王は正々堂々と騎士らしく敵軍と会戦し、両者の間ですさまじい戦^{いくさ}が繰り広げられました。だが、優れた学者エウセビオス【二六〇?—?三四〇年。神学者・教会史家】の書にありますよう

に、雌雄を決する日、大層剛勇で名うてのカシウエラウヌスの弟が、血に飢えた斬殺剣で、勇壮なローマの騎士たちを圧倒して命を奪つていったので、ローマ軍は死神のような彼の剣から逃げ去り、彼の行く先々で、彼に手向かえる者など誰もいませんでした。だが、ああ、何という不幸でしょうか、彼が敵軍との戦でへとへとなつてゐる時、つむじの曲がつたあまのじゃくの運命の女神の仕業によつて、彼は勇敢なシーザーと出会^{であ}しました。両者は、その書にありますように、トラヤライオンのように振る舞つて、互いに激しく傷つけあいました。突然、宿命^{フレイト}の配剤によつて、シーザーの血に飢えた剣の一撃が相手を真つ二つに切り裂きました。残念ながら、その書はこの立派な武将の名を述べていません。(私も彼がブリタニア王カシウエラウヌスの弟ということ以外は何も知りません。)ブリタニアの軍勢が彼の死を嘆くのも当然でした。この偶然の出来事によつて、シーザーは勝利を治め、カシウエラウヌスはローマ帝国に服従し、毎年三千ポンドの貢ぎ物を差し出すように強いられました。

この征服と名声を轟かす勝利のしるしに、ジュリアス・シーザーはこの地に様々な城と町を築き、自らの名を永遠の記憶にとどめようとしてきました。例えば、ドーバー、カンタベリー、ロチェスターの城やロンドン塔、それにシーザーの名にちなんで、今日ではソールズベリーと呼ばれる、シーザーズベリーの城と町があります。そのほか、エウセビオスが述べていますように、今日ではチチェスターと呼ばれるシーザーズチチェスターやエクセター^{エクセター}の城も彼が築いたものです。

分裂の大蛇

昔の書物が述べますように、ローマの都は、かつて名声を轟かせて至福の光を放ち、栄華を極めていました。―古代の書物に記されていますように―建国当初、都の城壁はロムルスとレムスの勇敢かつ賢明な尽力によって高々と築かれ、以来、都は国王の名のもとに治められていました。だが、タルクイニウス高慢王【七代目の王】の息子【セクストゥス】が元老院議員コラティヌスの妻ルクレティア【古代ローマ伝説の貞婦】に陵辱を働いたかどで、彼の罪はコラティヌス一族の断固たる追及と元老院全員の賛同によって処罰され、王政は永久に廃止されて、タルクイニウス一族は追放されてしまいました。その後、元老院の賢明な進言により、ローマは二人の執政官によって統治されました。その統治はポンペイウス高慢侯がティルス【古代フェニキアの港市】の町を占領して、力づくでローマ帝国に従属させ、凱旋し名將として迎えられた時まで続きました。それから異彩を放つ彼はローマを治める三人の一人に任命されました。彼と共に任命されたのは、騎士として誉れの高いジュリアス・シーザーとマルクス・クラッススでした。その後、執政官という名称は独裁官に換えられました。独裁官というのは、当時、民衆を統治する君主に適した官職の呼称でした。

ある特別な理由からですが、この職権は、元老院の満場一致で、彼ら三人に託されました。これは一人が失政を犯しても、他の二人にその者を正す権限を与えるためでした。別の理由としては、二人が遠征して留守にし

ている間、もう一人が国内を統治しておくためでした。

彼ら三人が心を通わせて、不和の仲に陥らない間は、ローマは繁栄の一端をたどりました。だが、不正の食欲が傲慢と愚かな野心を（人の心に）招き入れるとすぐに、疫病のような分裂の大蛇おろちが彼らの栄光を陰らせ色褪せさせました。本当に、「すべての王国は分裂によって滅亡する」という金言どおりでした。というのは、シーザー一派の横柄な傲慢さとポンペイウス一派の嫉妬と疫病のような食欲さのために、誉れ高いローマの都はひどく荒廃したからでした。夥しい財宝の散逸は言うに及ばず、かつては並ぶ者の無い程の騎士と称された戦士らも完全に壊滅し見る影もなくなりました。遂に、彼らの間に巣くう不正の分裂は手に余るほどになり、彼らは全世界との交戦を凌駕する猛威でローマの都を荒廃させました。それはこの短い物語が（これから皆さんに）簡潔に述べるとおりです。

マルクス・クラッススは、六つの騎士団を引き連れて、北方のパーティア王と戦うために派遣されました。勇敢なジュリアス・シーザーも別の六つの騎士団ともに派遣され、広大で恐ろしいロンバルディア【イタリア北部地方】の辺境を通過し、アルプス山脈を越え、ドイツの平原と西ドイツを下りました。やがて彼は武勇と恐るべき剣の威力でフランス全土を服従させ、ブルゴーニュ【フランス南東部地方】、ブラバント【ヨーロッパ西部の旧公国】、フランドル【ベルギー西部・オランダ南東部・フランス北部を含む北海沿岸地域】、オランダの全土を征服しました。それは五年間ルストルム、即ち、ローマ人に対して定められた五年間の期間がほぼ切れるまで続きました。

(試訳)

分裂の大蛇

ジョン・リドゲイト 作
轟 義 昭 訳

はしがき

(1) ジョン・リドゲイトは「十四万五千行もの詩作を残した、類を絶する多作家」^(註一)と知られているが、ここに取り上げた『分裂の大蛇』(The Serpent of Division) は、一四二二年に制作された、彼の唯一の散文作品である。

この作品は、W. Schirmer の言葉を借りれば、「説教に似せて注意深く作り上げられた小冊子」^(註二)「伝道者の政治的小冊子」^(註三)で、シーザーとポンペイウスの内乱(Civil War)を例証として、内乱の恐怖を示そうとしたものである。

(2) この作品のなかでリドゲイトは、ルカヌスの考えを引用しながら、分裂には三つの要因があるとしている。一つは自然の作用のように必然的なもの、一つは運命の女神(Fortune)による慣習的なもの、一つは人間の欲が引き起こす意欲的なものである。これら三つのなかで、彼が重きを置いていたのは最後の要因である。このことは、彼が修道僧であったことを指摘すれば、事足りると思うが、本文中の「シーザーの野心的な傲慢さ、ポンペイウスの焼き尽くすような嫉妬(の炎)、それにマルクス・

クラッススの飽くことを知らない貪欲さが、如何に彼ら自身の破滅を招いて、残酷な死を遂げる主な原因であったか、十分に考慮して例証として下さい」のような言葉からも判断できるだろう。

(3) 訳出にあたっては、Henry Noble MacCracken ed., *The Serpent of Division* (New Haven: Yale University Press, 1911) のテキストを底本とした。

(4) 人名・地名の訳出にあたっては、『リーダーズ英和辞典』(研究社)を参照した。例えば、Cassibolan はカシウエラウヌス(Cassivellannus)、Arymye はアリミニム(Ariminum)のちうごである。しかしながら、Faustus Cilla Postumus のような特定できない人物については、【】に入れてどおり表記した。また、必要と思われるものについては、【】に入れて、簡単な説明を加えた。

(5) シーザー暗殺の首謀者「Brutus Cassius」について言及しておこう。『分裂の大蛇』の編者 Henry MacCracken の解説によれば、リドゲイトが用いたその語句の典拠は、チョーサーの『修道院僧の話』(二六九七行目) ということである。そこで *The Riverside Chaucer* を参照してみると、^(註四)チョーサーがブルータス(Brutus)とカッシウス(Cassius)を一人の人物とした最初の作家ではないが、その記載は誤りであり、リドゲイトもチョーサーの誤りを少なくとも四回は引用しているということが分かった。このような実情を考慮して、その語をブルータス・カッシウスではなく、ブルータスとカッシウスと訳した。